
研究創案ノート

シリア・ムスリム同胞団とムスタファー・スィバーイー

— 現代シリアにおけるイスラーム運動の動態的研究への視角 —

末 近 浩 太*

**The Syrian Muslim Brotherhood and Muṣṭafā al-Sibā'ī:
A Methodological Approach to the Study of the Islamic
Movements in Contemporary Syria**

SUECHIKA Kota*

The Syrian Muslim Brotherhood, which is the most prominent Islamic movement in the Syrian Republic, has rarely been examined, whether in its organisational or its ideological dimensions. This can be attributed to the fact that the Brotherhood has been outlawed and militarily suppressed by the Ba'athist regime since the early 1960s. In order to move towards a more comprehensive understanding of the movement, this research note will try to explore the ideological dimension of the Syrian Brotherhood, focusing on the inner logic of the movement during its formative period. This will be done by studying its most influential ideologue, Muṣṭafā al-Sibā'ī (1915-64), during the formative period of the movement from the 1940s to 1960s. The aim of this research note, however, is not only to fill a blank in the study of the Syrian Brotherhood, but also to consider a methodological approach to it. Since most scholars of “Republican Syrian Studies” perceive the Syrian Brotherhood as an anti-establishment sub-actor to the regime, one can say that the analytical framework for the study of the movement as a subject in itself has not yet been established. The present task is thus to make case studies and derive from them some theoretical arguments.

Accordingly, this research note suggests that “Contemporary Syrian Studies,” when understood as Area Studies, can facilitate proper understanding of the Syrian Brotherhood under the leadership of al-Sibā'ī. The Syrian Brotherhood thus should not be exclusively dealt within the context of the Syrian Republic, but within that of Syria (Greater Syria, al-shām) as an ‘area’ still undergoing various attempts at state-building, which include “Syrianism” and Arab nationalism. This drive towards state-building is traced back to the time of the collapse of the Ottoman Empire and the interwar period

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

when the present nation states (the “Lesser Syrians” such as Republican Syria, Lebanon, Jordan, Palestine/Israel) emerged as a result of the geographical division of Syria by Britain and France. To observe al-Sibā‘ī and the Syrian Brotherhood through the prism of the dynamics and interrelations of these various ideologies surrounding the question of ‘how Syria ought to be’ will help to overcome the established recognition of the dichotomy between the Syrian Brotherhood vs. the Ba‘th party or, by extension, Islam vs. secularism, and to draw a more sound picture of the movement.

1. はじめに：問題の所在

今日、シリア・ムスリム同胞団は、共和国シリア内の最大のイスラーム運動である。それにもかかわらず、その思想・活動に関する研究は乏しく、実態はほとんど把握されていない。その原因は、60年代前半における運動の非合法化と政府による度重なる弾圧のため、活動そのものが地下に限定されていることや、公開される情報が極めて少ないことが挙げられよう。運動の総合的理解に向けて、筆者は、特にこれまで注目されてこなかったシリア・ムスリム同胞団の思想家たちに焦点を合わせてみたい。現代のイスラーム運動を理解するうえでは、思想という内的なダイナミズムを検討することは不可欠な作業であり、イスラーム世界にはそれを読み解くためのテキストが豊富に存在する。

そこで本稿では、時代を同胞団の形成・発展期である1940年代後半から60年代初頭に設定し、シリア・ムスリム同胞団の創設者であり最大のイデオログとされるムスタファー・スィバーイー (Muṣṭafā al-Sibā‘ī, 1915-64) の思想をとりあげる。スィバーイー思想と黎明期の同胞団を考えることは、運動の全体像を把握するうえで極めて重要な意味を持つ。ただし、ここで目指すのは研究上の空白を埋めることだけではない。むしろ問題は、研究の欠如という事実よりも、同胞団を副次的な存在として「周縁化」し、またそれを容認し続けてきた、これまでの「シリア研究」における方法論的前提にあると言える。このことは、主体としての同胞団を分析するための枠組みが確立されていないことを意味する。したがって、事実の解明と方法論的前提の検討、言いかえれば事例と分析枠組みとを同時に議論せざるを得ないのが現状であり、当面の課題は両者の双方向的考察を進めることである。本稿の目的は、そのための1歩を踏み出すことにある。以下では、まず、スィバーイーと当時のシリア・ムスリム同胞団の素描を試み、彼らを捉えるための方法論的前提を検討する。そして、それがシリア・ムスリム同胞団の総合的理解に対してどのような意味・意義をもつのか考えてみたい。

なお、本稿で示される「シリア」とは、特に指定のない限り現在のシリア・アラブ共和国ではなくいわゆる「歴史的シリア」(アラビア語では「シャーム地方」または「スーリーヤ」と呼ばれる)を指す。それは、今日のシリア・アラブ共和国(以下共和国シリア)、レバノン、

ヨルダン、パレスチナ／イスラエルにトルコとイラクの一部を加えた、ダマスカス（シャーム）を中心とする緩やかな境界認識に基づいた地域である。

2. スィバーイーとシリア・ムスリム同胞団の誕生・発展

2.1 スィバーイーの生涯と思想

ムスタファー・スィバーイーは、第一次大戦中の 1915 年、オスマン帝国領シリアのホムスに生まれた。帝国の連合国側に対する敗北後、シリアは英仏によって分割・支配され、現在の共和国シリア、レバノンといったネイション・ステイト群（筆者は「小シリア群」と呼ぶ）に再編されていった。イスラーム国家オスマン帝国が解体され、民族、宗教、国家といった概念が流動化していた時期にスィバーイーは育ち、生涯の半分以上を列強の植民地支配下で過ごした事実は、彼の思想と活動を考えるうえで重要な点である。

著名なウラマーの家系に生まれ、幼少期よりイスラーム学を学び、18歳のときにはカイロのアズハル学院に留学、イスラーム法学の博士号（アーリミーヤ）を取得する。その一方で、スィバーイーは、ラシード・リダーがカイロに設立した「ダウワ・イルシャード（教宣と教導）学院」でも学び、改革派のイスラーム思想に大きな影響を受けたとされる。スィバーイー思想は、思想史的にはリダーらの「マナール派」のサラフィー主義の流れをくむものであり [小杉 1994: 126]、イジュティハード（法規定発見のための努力・営為）の活性化によってイスラーム法の現代的解釈を行い、近代以降のイスラーム世界で生じた諸問題に立ち向かうことを目指した。そのことは、スィバーイーが編集・発行したシリア同胞団の機関誌『マナール』と『新マナール』の名称に表れていると言えよう。スィバーイーは、1945年からダマスカス大学で教鞭を取り、55年にはシャリーア学部を設立、自ら学部長に就任し『イスラーム法学全書』の編纂に尽力するなど、イスラーム法教育の分野で大きな功績を残している。著書は『スンナとイスラームの立法におけるその位置』（初版 1949年）や『預言者伝』（初版 1962年）などが挙げられるが [al-Sibā'ī 1998; 1999]、思想家としての彼の名を世に知らしめたのが『イスラームの社会主義』である [al-Sibā'ī 1960]。本書に関しては、第4節で触れることとする。

このような学問的領域だけでなく、政治的領域において積極的にその思想を実践しようとしたところに、スィバーイーのひとつの特徴がある。彼は西洋の侵略に対するイスラーム世界の防衛を訴え続けた。最初の反植民地主義活動は 15歳のときであると言われており、その後生涯で5度にもわたり英・仏植民地勢力に逮捕・投獄されている。拷問や強制労働を含む過酷な獄中生活がもとで身体を患い、1964年に死去するまでの約20年間、闘病生活を送ることとなった [al-Iṣṭawānī 2000: 27-37]。しかしながら、この20年間こそが、スィバーイーが思想家として、そして政治活動家として最も輝いた時期であった。それを象徴するのが、1946年に結成されたシリア・ムスリム同胞団である。

2.2 シリア・ムスリム同胞団の史的展開

スィバーイーは、エジプト留学時代に同国のムスリム同胞団のメンバーとして、当時エジプトを支配していたイギリスに対する闘争に参加した。ムスリム同胞団の創設者ハサン・バンナーとは、生涯を通じた友人であったとされる [Abd-Allah 1983: 98; al-Iṣṭawānī 2000: 30-34]。1941年にエジプトから故郷のシリアに戻った後も、ホムスで「ムハンマド青年団」を設立し、フランス植民地政府に対する闘争を展開したが、46年に当時活動していたさまざまなイスラーム団体を統合、正式にシリア・ムスリム同胞団を名乗った。そして、スィバーイーはシリア・ムスリム同胞団組織の初代「最高監督者」に選出された。40年代はエジプトで始まった同胞団が他の「小シリア群」にも次々に支部を設立していった時期でもあるが、シリア同胞団は独自の発展を遂げた。逆に言えば、シリア・ムスリム同胞団は、共和国シリアに根ざして形成されたイスラーム運動であると同時に、アラブ世界に広がるムスリム同胞団ネットワークの主體的な構成要素として、一区域である共和国シリアでの役割を担う存在であった。

1946年の共和国シリア独立後から、63年のバアス党による全権掌握までのあいだは、シーシャクリー政権（1951-54年）やエジプトとの合邦期のナセルによる政党活動禁止などによりたびたび中断したものの、基本的にはリベラルで民主的な政治が行われた時期である。この間のシリア・ムスリム同胞団の政治活動の特徴は議会政治への参加であり、49年には「イスラーム社会主義戦線」を組織し、スィバーイーも議員当選を果たした。そして、イスラームの国教化、シリア（「小シリア群」）の統一、アラブの統一、イスラエルの解体、積極的非同盟中立の必要性などを訴えた [Abd-Allah 1983: 99, 134-136; Reissner 1980: 332-333; al-Sibā'ī 1954: 215-217]。今やシリア同胞団の活動において、植民地主義に対する闘争ではなく、イスラームに立脚した国家・社会建設に主眼が置かれたのである。

世俗的アラブ民族主義を掲げるバアス党の一党独裁体制の確立とスィバーイーの死去以後、シリア・ムスリム同胞団は長い「冬の時代」に入り、自他共に認める「反体制派」としての性格を強めていく。1958年にスィバーイーの後を継ぎ指導者となったイサーム・アッタールが63年に国外追放となり、さらに急進派と穏健派とのあいだで指導部は分裂した。力による激しい弾圧を受けたシリア・ムスリム同胞団は、79年シリア国内のイスラーム諸勢力と糾合し「シリア・イスラーム戦線」を結成、「シリア・イスラーム革命宣言」を発表し武装闘争を激化させたが、82年の「ハマー虐殺」をきっかけに、以後活動の後退を余儀なくされた。しかしこの事件は、バアス党政権の強固さを示すと同時に、シリア・ムスリム同胞団の「健在ぶり」を国内外に印象づけ、「共和国シリア最大の反体制派」としての地位を確立するきっかけとなった。90年代半ば以降は、政府と同胞団の和解が徐々にではあるが進展しており、共和国国内、広くはシリアの政治的趨勢を考えるうえで注目される。

1947年から58年にかけてのスィバーイー指導下のシリア・ムスリム同胞団は、その歴史に

において「最も豊かで創造的であった」と評される [Abd-Allah 1983: 99]。比較的リベラルな政治・思想環境を含む時代状況とともに、創設者であり最大のイデオログとしてシリア・ムスリム同胞団の確立に貢献したスィバーイーの存在が、こうした評価の背景にあるのであろう。スィバーイー思想とこの時期の同胞団の活動に注目し、主体としての彼らが提起しようとした問題群を浮彫りにすることは、その後の同胞団の動向ないし地域としてのシリアの理解に大きな意味を持つと言えるだろう。

3. スィバーイーとシリア・ムスリム同胞団の理解のための 方法論的前提：2つの「シリア研究」

ムスタファー・スィバーイーの思想ないし当時のシリア・ムスリム同胞団をどのように捉えるべきか。本節では、先行研究に触れ、その問題点を指摘しながら、この問題を考えてみたい。

3.1 「共和国シリア研究」

シリア人スィバーイーとシリア・ムスリム同胞団については、多くの場合が「シリア研究」において語られる。「シリア研究」とは、普通「共和国シリア研究」を意味するが、その特徴は、バアス党の思想（バアス主義）と一党独裁体制の「特殊性」や国家間問題（地域的問題としてではない）としての「パレスチナ問題」の重要性から、国家あるいはそれを担う体制側を主要なアクターと見なす傾向にある。イスラーム運動は共和国内の副次的な存在として捉えられ、その結果彼らの視点からの議論が決定的に不足することとなっている。特にスィバーイーが活躍したポスト独立期（1940年代後半から50年代）に関して言えば、この時期の政治・社会を扱った研究ですでに古典的名著とされているP・スィールの著作においても、シリア・ムスリム同胞団には4カ所、スィバーイーには3カ所で言及されるにとどまっている [Seale 1965]。主体としてのイスラーム運動自体を扱った研究としては、U・F・アブドゥッラーとJ・ライスナーの著作など数点が挙げられるのみである [Abd-Allah 1983; Reissner 1980]。

「共和国シリア研究」におけるこのような問題・対象の設定の偏向性に対しては、時代状況や研究上の制約があったことを認めたい。近年では反省的点検を進める動きも見られる。共和国シリアの政治的・社会的趨勢を語るうえでイスラーム運動が重要な意味を持っていたことが指摘され、バアス党、軍部、イスラーム勢力の相互の関係を軸にした分析の試みがなされている [Talhawi 2001: 110-112]。ここで強調すべき点は、バアス党に代表される「世俗主義勢力」を一方の極に据えたうえで、その対極としてイスラーム勢力を設定すべきではない、ということである。それでは従来の方法論的前提の裏返しに過ぎない。また、第4節で論じるように、そのような二項対立的な見方自体が、ひとつのイデオロギー的な立場であるか、もしくは1960年代以降顕在化した「体制」対「反体制」の構造をポスト独立期に投影しているのだと

言える。このような静態的な二項対立的認識を克服し、主体としての同胞団の理解を促すと考えられる分析枠組みが、もうひとつの「シリア研究」である。

3.2 地域研究としての「現代シリア研究」

共和国シリアを含むポスト独立期の「小シリア群」（広くはアラブ諸国）において、ネイション・ステイトの国境線が所与のものとなる一方で、それを再編成するようなさまざまな国家構想が展開されていたことに注意しなくてはならない。東西冷戦構造のなかでの共和国シリアにおける度重なるクーデター（1949年の1年間だけで3回）のように政体のあり方を模索する動きと、アラブ民族主義や統一シリア国家建設構想（「シリア主義」）など国家そのものの枠組みを再編成しようとする試みとの連動が、若いネイション・ステイト群の解体の可能性に一定のリアリティを与えていた。

こうした国家構想の競合状態が顕在化した画期は、大戦間期の英仏による「シリア分割」に遡ることができるが、それは英仏による領域的な分割のみならず当事者たちの「シリア」をめぐる観念の分極化でもあった。レバノンやパレスチナの「分離独立」構想、「シリア主義」、アラブ民族主義への初段階としての統一シリア国家建設などは、オスマン帝国の崩壊すなわちスルターン＝カリフの二重中心性の消滅の結果、宙に浮いたシリアの政治的位相を再規定しようとする営為であったといえる。それぞれの国家構想が、ダマスカスを中心としたひとつの地域単位としてのシリアのあるべき姿を追求する営為であり、その意味では「小シリア群」の成立後も当事者のあいだで地域としての「シリア」は存在し続けていたのである。

スィバーイーとシリア・ムスリム同胞団は、その活動の「場」を共和国シリアにおいていたが、その影響力や彼ら自身の意識は越境性を備えるものであった。1947年スィバーイーは、ヨルダンのアブドゥッラー国王の唱える統一シリア国家構想を厳しく非難するが、それは共和国一國主義を採っていたのではなく、むしろ領土や政体のあり方をめぐる彼自身のシリア観（トルコに「割譲」されたハタイ（イスカンドルーン）を含むシリア領土の完全回復と民主的政治の維持）を持っていたためである [Reissner 1980: 410-415]。また、スィバーイー率いるイスラーム社会主義戦線は、共和国議会でイスラームの国教化を要求するが、それはシリアの統一、アラブ諸国の統合、さらにはインドネシアやパキスタンといった非アラブのムスリム諸国との連帯を射程に入れたものであった。イスラームはそのための「強力な要素」になると考えられていたのである [al-Sibā'i 1954: 219-221]。

このような共和国、シリア、アラブといった共同体認識の重層構造は、スィバーイーのみに見られる特殊なものではない。統一アラブ国家建設をイデオロギー的基軸とするバアス党もシリアの統一を掲げており、また共和国内で「保守派」と呼ばれた人民党すらイラクとの統合を模索した。このように少なくとも理念上は、自己完結的な共和国をアプリアリナ存在とせず、その政治的位相は常にシリアとの関係性のなかで語られるという点で、ポスト独立期のさまざ

まな政治勢力には奇妙な一致が見られるのである。

理念だけでなく、現実の現象においても「越境」は確認できる。たとえば、スィバーイーは、暗殺されたバンナーの後を継いだハサン・フダイビーの逮捕（1954年）後、エジプトから「小シリア群」にかけて支部を拡大していたムスリム同胞団ネットワークの事実上の指導者となった。その際、イスラーム運動に対する弾圧が強まったエジプトから多数の同胞団員がシリアに流入している。また、シリア人たちによる「小シリア群」の境界線を越える往来も依然として活発であり、特に共和国シリア、レバノン、エジプトを中心とした思想家や知識人たちのネットワークは大きな影響力を持っていた。そして、国家の枠組みの再編成が現実となったのが、シリアとエジプト両国の合邦によるアラブ連合共和国（1958-61年）の結成である。

以上見てきたように、スィバーイーないしシリア・ムスリム同胞団を理解する際には、ネイション・ステイト群としての「小シリア群」の存在を維持する力学と、それを再編しようとする力学とのあいだの緊張関係が展開されている空間として現代のシリア（オスマン帝国崩壊以降のシリア）を捉え、そのなかで位置づけを行うことが必要であろう。こうした姿勢は「小シリア群」を所与のものとし、ない点で「共和国シリア研究」と決定的に異なるが、一方で「統一シリア」を唯一の選択肢とするといった「歴史的シリア」への単なる回帰を意味するものではない。現代のシリアのありかたをめぐる力学の緊張関係は、「小シリア群」／「統一シリア」という二者択一ではなく、地域としてのシリアがアラブといった上位の地域に組み込まれる契機をも含むためである（その意味では「小シリア群」／「統一アラブ」というアラブ民族主義的な二者択一でもない）。「共和国シリア研究」の一定の有効性を確認したうえで、ネイション・ステイト群の存在もアラブ民族主義も地域の論理の一部とする地域研究としての「現代シリア研究」を、筆者は提唱したい。

4. 二項対立的認識を超えて：『イスラームの社会主義』を手がかりに

「現代シリア研究」の枠組みをもってスィバーイー思想と当時を検討することは、シリア・ムスリム同胞団の総合的理解に対していかなる意味・意義を持つのであろうか。ここでは具体的な事例として『イスラームの社会主義』とそれをめぐる評価を取りあげ、この問題を考えてみたい。

4.1 『イスラームの社会主義』について

スィバーイーの『イスラームの社会主義』の全編を貫くキーワードは「社会的相互扶助」であり、それを実現するための新しいかたちでの「イスラームの立法化」が不可欠とされる。具体的には人間が有する5つの「自然権」（生存、自由、知識、尊厳、所有）の確保を目的とし、その実現のために必要な法律・法規が詳細に示される [al-Sibā'i 1960]。ここで注目すべきは、スィバーイーも序文で述べているとおり、本書の目的が立法化されたイスラームの提示にあ

る点である。クルアーンやハディースを典拠とする論法様式をとっており、ここにイジュティハードを重視する「マナール派」のサラフィー主義の特徴が見られるが、「社会主義」というタームは今日の「流行」であり、平等で公正な社会建設を目指すといった「社会主義」の観念そのものは預言者時代から存在していたとする [al-Sibā'i 1960: 6-7]。『イスラームの社会主義』は、マルクス主義の唯物論的姿勢を批判し、預言者時代にみるイスラーム的規範を現代的なターム（たとえば「社会主義」や「国有化」など）を鍵に再編成・立法化することで、イスラーム法の現代的有効性を示すのである。

本書の第1版が出版されたのは1959年であるが、当時はアラブ連合共和国の成立期であり、ムスリム同胞団がエジプトでは非合法化、共和国シリアではスィバーイー自身が解散を宣言していた。したがって、『イスラームの社会主義』をシリア・ムスリム同胞団の思想とする見方には留保がある。青山の研究では、それがシリア・ムスリム同胞団の思想と同一視されており、バアス党やナセル主義との政争に敗れる原因となった「静態的な理論」と捉えられているが [青山 1995: 57-58]、これは1960年代以降のシリア・ムスリム同胞団の国内での活動の行詰まりという結果のみを重視した評価であり、スィバーイー思想を過小評価する危険性を孕んでいるといえる。ここには、共和国の境界線を自明視し、バアス党体制や国家を主要なアクターとする方法論的前提に基づきイスラーム運動とその思想を分析することの限界性の一側面が浮彫りにされている。『イスラームの社会主義』は、それまでのシリア・ムスリム同胞団の思想の集大成であると同時に、統一に向かいつつあるアラブ全体を対象に発信された思想であったと捉えられるべきであろう。

4.2 「イスラーム」と「世俗主義」の有機的相互浸透

『イスラームの社会主義』は、アラブ連合共和国政府により高く評価され、1961年の分離後のエジプトでもナセル政権が組織した「アラブ社会主義連合」によって、公定イデオロギーとしての「アラブ社会主義」の一翼を担うものとして無料配布された [Ayubi 1980: 498]。組織レベルでは、多様な社会主義勢力の連合体である「アラブ社会主義連合」のなかで、「イスラームの社会主義」勢力は「アラブ社会主義」派や「社会主義へのエジプトへの道」派とならぶサブ・カテゴリーであった [板垣 1967b: 18-19]。近現代アラブ思想史や現代エジプト研究の多くでは、こうした事実からスィバーイーは評価される。すなわちアラブ諸国での「社会主義」の台頭という現状を追認したものであり、専制化していくナセル政権を結果としてイスラーム的に正当化する役割を果たした、というものである [Enayat 1982: 139-150]。ここには、『イスラームの社会主義』を「ナセルと対立関係にあるムスリム同胞団のシリア支部の思想」と捉える対立構造が暗黙の前提として存在する。

これはナセル側に重点を置いたひとつの見方であり、今日でも研究上の「伝統」となっていることは否めない。しかし、スィバーイー側に視点を移した場合どうであろうか。スィバー

イーにとっての『イスラームの社会主義』は、アラブ社会主義のサブ・カテゴリーではない。上述のように、彼の思想上の「母集団」はあくまでもイスラームであり、そのなかに社会主義観念を見出しているためである。原題である『イシュティラーキーヤ・イスラーム』は、本来『イスラームの社会主義 Socialism of Islam』と訳されるべきであるところが、多くの場合で『イスラーム(的)社会主義 Islamic Socialism』とされていることが、この認識のズレを如実に表している。スィバーイーは、『イスラームの社会主義』の発表を通して、アラブの統一とそのイスラーム化という目標(ムスリム同胞団の目標でもある)のために、アラブ連合共和国の結成とその左傾化を最大限に利用しようとし、アラブ全体にむけて『イスラームの社会主義』を発信したのだと考えられる。換言すれば、リアリティを増していくアラブ統一と新たな国家・社会を建設する動きを、イスラーム的な性質へと転換させようとする試みであり、時代の要請に応えるかたちでの新しいイスラームのあり方を提示したのだと言えよう。

以上のような、エジプトや共和国シリアの国家の枠組み、そして研究の枠組みを今一度問い直し、そのうえでスィバーイー思想を検討することは、思想自体に対する理解を深めることはもちろん、より均整のとれたシリア・ムスリム同胞団像を描くことに繋がる。すなわち、従来のようにナセル側から当時の思想状況全体を「俯瞰」するのではなく、スィバーイーというひとりの思想家と目線の高さを合わせることは、思想レベルでの両者の関係を単純な対立や支配／被支配ではなく、むしろ有機的相互浸透を伴ったものと捉えることを可能にする、と、筆者は考えている。スィバーイーは「社会主義」という現代的なかたちでイスラーム法を提示したが、ナセルは自身が提示する「社会主義」にイスラームに立脚した諸要素を取り込もうとしたのではないか。それぞれの思想レベルでの固有相対性と相互通底性を動的に考察していくことは、ナセル政権対ムスリム同胞団、広くは「世俗主義」対「イスラーム」といった二項対立的認識を超克するきっかけとなるだろう。その結果、ナセル政権またはバアス党政権とムスリム同胞団との組織レベルでの対立を本質的・静態的なものとせず、両者のあいだの拮抗・調和が生まれる契機を動的に検証することで、主体としてのシリア・ムスリム同胞団の実態の解明に貢献できるのである。

5. 結語：課題と展望

本稿では、地域研究としての「現代シリア研究」を提唱し、その視角からムスタファー・スィバーイーとシリア・ムスリム同胞団を理解することの重要性を論じてきた。アラブ民族主義や「シリア主義」の伸長に見られるように、「小シリア群」成立後も大戦間期に生じたシリアをめぐる国家構想の競合状態は継続しており、そのため、共和国シリアの枠組みに固執せず、上位と下位への解放性を備えたひとつのエンティティとしてのシリアを見ていく必要がある。このような方法論的前提に立脚することで、『イスラームの社会主義』の事例を通して見

たように、従来のネーション・ステイトの枠組みに強く規定された二項対立的認識や静態的な議論を超えた、新たなダイナミックなスィバーイー像ないしシリア・ムスリム同胞団像を描き出すことが可能となるだろう。

構造的・認識的「シリア分割」は、それ自体が決して歴史上のできごととして終始しない。レバノン内戦（1975-91年）や地域の問題としての「パレスチナ問題」などを見れば、それは今日まで続く「未完の物語」と捉えるべきである。「シリア分割」における地域再編のリアリティは増減しており、また80年代前半にはイラン革命の成功に伴うイスラーム的地域再編の可能性が囁かれるなど質的な変化も見逃せない。共和国シリアの誕生・発展は、いわば大きな物語のなかのエピソードのひとつであり、その意味では、地域の実態を把握しようとする際に「共和国シリア研究」が露わにする限界性は、その定められた領域以上のものがあると言わざるを得ない。したがって、「現代シリア研究」の分析枠組みは、スィバーイー指導期以降のシリア・ムスリム同胞団の実態解明においても有効であると考えられよう。

参 照 文 献

- Abd-Allah, Umar F. 1983. *The Islamic Struggle in Syria*. Berkeley: Mizan Press.
- Ayubi, Nazih N. M. 1980. The Political Revival of Islam: The Case of Egypt, *International Journal of Middle East Studies* 12.
- Enayat, Hamid. 1982. *Modern Islamic Political Thought: The Response of the Shī'ī and Sunnī Muslims to the Twentieth Century*. London: Macmillan.
- al-Iṣṭawānī, Muḥammad Bissām. 2000. *Muṣṭafā al-Sibā'ī: Ṣaḥābāt min Jihād Mutawāṣil*. Beirut: Dār al-Warrāq.
- Karpat, Kemal H., ed. 1982. *Political and Social Thought in the Contemporary Middle East*. Revised and Enlarged Edition. Westport, CT: Praeger.
- Reissner, Johannes. 1980. *Ideologie und Politik der Muslimbrüder Syriens: Von den Wahlen 1947 bis zum Verbot unter Adīb aš-Šīṣaklī 1952*. Freiburg: Klaus Schwarz.
- Riḍā, Muḥammad Rashīd. 1899. *Ishtirākīya wa al-Dīn*. In *al-Manār* 1.
- Seale, Patrick. 1965. *The Struggle for Syria: A Study of a Post-War Arab Politics 1945-1958*. Oxford: Oxford University Press.
- al-Sibā'ī, Muṣṭafā. 1954. The Establishment of Islam as the State Religion of Syria. In R. Bayly Winder, Islam as the State Religion: A Muslim Brotherhood View in Syria, *The Muslim World* 44 (3-4).
- _____. 1960. *Ishtirākīya al-Islām*. 3rd ed. Cairo: Dār al-Qawmiya lil-Ṭibā'a wa al-Nashr.
- _____. 1998. *al-Sunna wa Makānatuhā fī al-Tashrī' al-Islāmī*. Beirut: Dār al-Warrāq.
- _____. 1999. *al-Sīrat al-Nabawīya: Durūs wa 'Ibar*. Beirut: Dār al-Warrāq.
- al-Sibā'ī, Muḥammad Muṣṭafā, ed. 2000. *Muṣṭafā al-Sibā'ī: bi-Aqlāmi Muḥibbihi wa 'Arifīhi*. Beirut: Dār al-Warrāq.
- Sivan, Emmanuel. 1985. *Radical Islam: Medieval Theology and Modern Politics*. New Haven: Yale University Press.
- Talhami, Ghada Hashem. 2001. Syria: Islam, Arab Nationalism and the Military, *Middle East Policy* 8 (4).
- 青山弘之. 1995. 「シリア・ムスリム同胞団の政治理念と政策（1940年代～50年代はじめ）：『イスラーム

- 『社会主義』の政治路線』『アジア経済』36(11).
- アッスィバーイー, ムスタファー. 1993. 『預言者伝』中田 考訳, 日本サウディアラビア協会.
- 板垣雄三. 1964. 「アラブ社会主義論(上)」『思想』483.
- _____. 1967a. 「イデオロギーとしての〈アラブ社会主義〉」『思想』512.
- _____. 1967b. 「アラブ連合共和国における「社会主義」をめぐる問題」『中東通報』136.
- 木村喜博. 1987. 『東アラブ国家形成の研究』アジア経済研究所.
- 小杉 泰. 1994. 『現代中東とイスラーム政治』昭和堂.
- 末近浩太. 2002. 「ラシード・リダーと大戦間期のシリア統一・独立運動」『日本中東学会年報』17.